

南方熊楠の神社合祀反対運動における環境倫理的考察 —ディープ・エコロジーの視点から見た意義と内発的発展への潜在性—

永宮 祐司*, 佐藤 真久*

NAGAMIYA Yuji*, SATO Masahisa*

*武蔵工業大学 環境情報学部

[要約] 南方熊楠は明治時代に政府が中央集権化を図るために行った神社合祀政策に対して「エコロジー」の立場から反対運動を行った。神社合祀政策は、自然破壊に直結するものであるとともに、近代化論を軸とする近代化のあり方や外発的な発展の路線であると位置づけられる。本研究では、この南方の運動を、ディープ・エコロジー、内発的発展という環境倫理的視点から解釈・考察するとともに、外発的な発展が及ぼす影響、利点、問題点を明らかにし、発展のあり方に検討を加えた。これらの環境倫理的視点と南方の運動は、「エコロジー」的な視点による自然環境への配慮と地域性の重視という点で強い共通性があり、今後の発展の方向性として、その2つの要素を持つ内発的発展の視点を織り込んでいくことが重要となってくるのではないだろうか。また、今日の開発への国際的な議論との関連性から内発的発展の潜在性が見出された。

[キーワード] 南方熊楠, 神社合祀, 内発的発展, 外発的発展, ディープ・エコロジー

1. はじめに

民俗学者、粘菌・隠花植物の研究者として知られる南方熊楠^{みなかたたくまぐす} (1867 - 1941) は、明治時代に政府が中央集権化を図るために行った神社合祀^{じんじやごうし}政策に対して、「エコロジー」の立場から反対運動を展開した。日本の神社は、鎮守の森といって樹木に覆われていたため、神社合祀は自然破壊にも直結していた。このような神社合祀政策は、近代化論を軸とする近代化のあり方や外発的な発展の路線だと捉えられる。従って南方の反対運動における思想は、そうした近代化や外発的な発展への一種のアンチテーゼだとみなすことができる。近代化論を軸とする近代化のあり方や外発的な発展は、現在、発展途上国を中心に行われ、経済発展や工業化の進展には大きな貢献をしている反面、様々な環境問題を生み出しており、このような近代化の弊害をどう乗り越えていくかは重要な課題である。

2. 研究目的

本研究では、南方の神社合祀反対運動を、

ディープ・エコロジー、内発的発展という環境倫理的視点から解釈・考察し、彼のエコロジー的思想の意義を明らかにすることを目的とする。また、外発モデルにしたがう近代化路線と位置づけられる神社合祀政策(鶴見 1997)の検討を通じ、外発的な発展が及ぼす影響、利点、問題点を明らかにし、発展のあり方に検討を加える。

3. 研究方法

本研究では解釈論的アプローチを中心として、南方の神社合祀反対運動に関連する文献の詳細なレビューを行ない、それをディープ・エコロジー、内発的発展という環境倫理的視点から解釈と考察を行なった。さらに、Time-Ordered Matrix (時系列での事実関係のマトリクス) と Role-Ordered Matrix (役割別での事実関係のマトリクス) によって客観的事実の整理を行ない、解釈・考察に役立てた。

4. 理論的枠組み

本研究ではディープ・エコロジー, 内発的発展という 2 つの理論的枠組みを採用した。

4.1. ディープ・エコロジー

ディープ・エコロジーは環境問題の背景にある人間の精神的な側面に注目した環境倫理思想であり, ノルウェーの哲学者アルネ・ネスによって提唱された。ネスは先進国の人間の健康と豊かさがその中心目標となっている汚染と資源枯渇に反対する環境保護運動をシャロー・エコロジー運動と呼び, それは問題の一部に過ぎないのだと指摘している。そして, 現在の問題は多様性, 複雑性, 自律性, 分権, 共生, 平等, 無階級性という原理に触れる, より深い問題があるとして, ディープ・エコロジー (運動) を考えた (ネス 1973)。このディープ・エコロジーにはネスによる 7 つの主張がある (Box.1)

Box.1 アルネ・ネスによる 7 つの主張

- 生命や人間といった有機体を関係論的世界観の中で捉える
- 原則として生命圏平等主義をとる²
- 多様性と共生の原理
- 反階級制の姿勢
- 汚染と資源枯渇に反対する戦い(生態学者の役割が重要³)
- 混乱ではなく複雑性
- 地方の自律と脱集権化

(アルネ・ネス, 1973, 浅いエコロジーと深く長期にわたるエコロジー運動。一つの要約, 1999, 原典で読み解く環境思想入門 (A.ドブソン 編), pp.258-264, ミネルヴァ書房 / 小原秀雄 監修, 1995, 環境思想の系譜 3 環境思想の多様な展開, pp.106-116, 東海大学出版会より筆者作成)

そしてネスの 7 つの主張を軸にディープ・エコロジーの視点は次のように整理される (Box.2)。

Box.2 ディープ・エコロジーのさまざまな視点

- 7 つの主張 (Box.1 参照)
- 直接行動
- 自然との調和
- あらゆる自然には固有の価値, 生物種としてのとしての平等性がある (生命圏平等主義)
- 簡素な物質的ニーズ (自己実現の大きな目標に役立つ物質的ニーズ)
- 限られた自然の恵み
- 適正技術, 非支配科学
- 十分さ, リサイクルで対応
- 少数者の伝統の重視 (先住民のライフスタイル (伝統) に学ぼうという意識)・バイオリージョン

(アルネ・ネス, 1973, 浅いエコロジーと深く長期にわたるエコロジー運動。一つの要約, 1999, 原典で読み解く環境思想入門 (A.ドブソン 編), ミネルヴァ書房, pp.258-264, / 小原秀雄 監修, 1995, 環境思想の系譜 3 環境思想の多様な展開, p.138, 東海大学出版会より筆者作成)

4.2. 内発的発展

1960 年代ごろから環境破壊, 格差, 貧困, など地球規模の問題が表出し, 近代化に対する疑問が発展途上国, 非同盟諸国を中心にわきあがってきた。日本でも高度経済成長期の裏で, 四大公害などの深刻な環境破壊が起こっていたことから, 同じく近代化に対する疑問が出てきた。

こうした開発に関するさまざまな弊害が発生するまで, 主流の開発理論となっていたのが近代化論であった。しかし, 1970 年代初期に農業の伸びの目標未達成, 債務増大, 貧富の格差の増大のほか, 石油価格の高騰, 石油輸入国の不況, 食糧危機などの「開発」の挫折が起こったことで, 近代化論などの経済中心の開発概念だけではない, 人間中心のオルタナティブな開発アプローチの模索が 1970 年代頃から行なわれるようになった。

その人間中心のオルタナティブな開発アプローチの一つとして出てきたものこそ, 鶴見和子の提唱した内発的発展 (論) である。

内発的発展は鶴見によって, それぞれの地

域 4 の生態系に適合し、地域の住民の生活の基本的必要と地域の文化の伝統に根ざして、地域の住民の協力によって、発展の方向と筋道をつくりだしていくという創造的な事業と特徴づけられている（鶴見 1999）。

内発的発展の概要や視点を筆者は次のようにまとめた。

表 1 内発的発展の概要

目標	<ul style="list-style-type: none"> ●人間の成長 Human Development を究極の目標とする ⇒人間の成長とはそれぞれの人が持って生まれた可能性を十分に発揮できるような条件を創り出していくこと
発展の単位	<ul style="list-style-type: none"> ●地域（自然生態系の特徴を共有する村と町の連続体）を単位とする
モデル	<ul style="list-style-type: none"> ●複数モデル ⇒地域から地球規模の問題をとく手がかりを捜していこうとする
担い手	<ul style="list-style-type: none"> ●担い手は発想的、理論的、実践的 キー・パーソン

（鶴見和子・川田侃 編，1989，内発的発展論，東京大学出版会／鶴見和子，1999，コレクション鶴見和子曼荼羅 IX，藤原書店／鶴見和子，1997，日本を開く，岩波書店より筆者作成）

Box.3 内発的発展の視点

- 生態系に適合し、地域住民の基本的必要と文化伝統に根ざす
- 地域住民の協力、創意工夫による
- 自立的（自力更生・自助）である⁵
- 伝統の再創造⁶を重視する
- 異質なものとのかみあわせが必要（＝創造性を生む）
- 地域の開放性を重視
- 外来の知識・技術なども照合しつつ、地域の状況に適合するようにつくりかえて用いる
- 学者（研究者、知識人）と地域住民の交流により発展のモデルをつくる
- 近代化論の弊害をのりこえる
- 社会変化の過程
- 担い手はその目指す価値及び規範を明確に指示する
- 異なる地域の異なるモード（モデル）間の比較と関係が中心課題にある
- ホモロジカル（相同的）な接近法をとる

（鶴見和子・川田侃 編，1989，内発的発展論，東京大学出版会／鶴見和子，1999，コレクション鶴

見和子曼荼羅 IX，藤原書店／鶴見和子，1997，日本を開く，岩波書店より筆者作成）

5. 研究結果

神社合祀政策が行われるに至った一連の神道化の政策について、二次的文献のレビューを行なった結果、1871（明治 4）年の神社の社格の制定や、明治 20 年代（1880 年代後半～1890 年代前半）を通じて進められた神職制度の整備などによって、国家権力の支配が全国の神社に及ぶようになったことが明らかとなった。このように、一連の神道化の政策を通じて政府と神道界の間に支配と従属といった構造化された権力関係が形成され、それが神社合祀をより促進する要因となったことが明らかになった。

南方の神社合祀反対運動に関する文献として、彼の著した「白井 光太郎 宛書簡（神社合祀に関する意見）」、「松村 任三 宛書簡（南方二書）」の詳細なレビューを行なった。この二つの文献は南方の神社合祀反対に関する代表的な文献である。白井宛書簡では、地方官公吏や神職が自らの利益のために神社合祀を励行することへの批判とともに、「エコロジー」の視点を織り交ぜながら、神社合祀反対の理由が 8 点に整理され、具体例とともに述べられている（Box.4）。

Box.4 南方による 8 つの神社合祀反対の理由

- 第一、神社合祀で敬神思想を高めたりとは、政府当局が地方官公吏の書上に瞞されおるの至りなり。
- 第二、神社合祀は民の和融を妨ぐ。
- 第三、合祀は地方を衰微せしむ。
- 第四、神社合祀は国民の慰安を奪い、人情を薄うし、風俗を害することおびただし。
- 第五に、神社合祀は愛国心を損ずることおびただし。
- 第六に、神社合祀は土地の治安と利益に大害あり。
- 第七に、神社合祀は史蹟と古伝を滅却す。
- 第八、合祀は天然風景と天然記念物を亡滅す。

（南方 1912）

松村宛書簡では、地方官公吏・神職の不正の実態や、神社合祀の悪影響の指摘と反対意見が具体例とともに述べられており、さらに南方のそれまでの運動の展開などについても触れられている。

Time-Ordered Matrixによる整理では南方の神社合祀反対運動に関係する動きを時系列マトリクスに整理したほか、反対運動の協力者で、政府への働きかけの面で貢献をした中村啓次郎代議士の動きについても整理した。その結果、中村の動きによって政府が合祀に対して慎重な姿勢へとなっていったというように、その対応が時間とともに変化していったことが明らかとなった。

Role-Ordered Matrixによる整理では後藤（2002）の指摘による南方の3つの運動の方向性〔(1)公権力への働きかけ、(2)スペシャリストへの働きかけ、(3)ジャーナリスト及び一般民衆への働きかけ〕を参考に、反対運動に関わる人物を南方からの書簡の宛先等をもとに整理した。その結果、南方は、決して人数は多いとはいえないが、多方面での協力者を得ていたことが明らかとなった。例えば、先にとりあげた地元選出の代議士である中村啓次郎や、植物学者の白井光太郎、民俗学者であり官僚であった柳田国男、ジャーナリストの杉村楚人冠、地元紙である牟婁新報社社長の毛利柴庵などである。

6. 解釈・考察

南方の神社合祀反対運動をディープ・エコロジーの視点から解釈・考察すると、ネスの指摘するディープ・エコロジーの7つの主張を軸に、生態学的視点を織り込んだ見方との接点が強い。筆者はディープ・エコロジーの7つの主張と南方の運動との接点を表2にまとめた。

表2 ディープ・エコロジーの7つの主張と南方の神社合祀反対運動との接点

ディープ・エコロジー7つの主張	南方の神社合祀反対運動との接点
生命や人間といった有機体に関係論的世界観の中で捉える	<ul style="list-style-type: none"> ●人間と自然の密接な関係を「エコロジー」的な視座から捉えた発言やさまざまな生物が自然の中で有機的関連を持っているといった視座がある
原則として生命圏平等主義をとる	<ul style="list-style-type: none"> ●人間と自然の有機的な関連性を指摘し、人間がその自然を破壊することで人間自身にも影響が出ることを指摘している <生命圏平等主義の根ざす考え方との接点>
多様性と共生の原理	<ul style="list-style-type: none"> ●ある生物の生存には他の生物の生存もまた必要である、という意味の指摘がある
反階級制の姿勢	<ul style="list-style-type: none"> ●権力者の不正への非難、地域の自治や自立に関する発言がある
汚染と資源枯渇に反対する戦い（生態学者の役割が重要）	<ul style="list-style-type: none"> ●南方の運動において汚染と資源枯渇は重要性が高かったとはいえないが、「エコロジー」的な視座に基づいてさまざまな方面への情報提供と協力要請 <生態学者の情報提供者としての役割との接点>
混乱ではなく複雑性	<ul style="list-style-type: none"> ●一部の自然の改変が思いもよらないような影響を及ぼすという指摘がある
地方の自律と脱集権化	<ul style="list-style-type: none"> ●神社の存続について民に任せるべきなど、地域の自立や自治といったものに関する種々の意見がある

（筆者作成）

また、南方は運動の展開面において、ディープ・エコロジーが重視する直接行動の側面が強く、多方面の協力者を得て、多様な運動の展開を行った。それは、ディープ・エコロジーの直接行動を重視する点や、生態学者の情報提供者としての役割の重要性といった側

面とも共通する。つまり、南方の運動はその展開面においても、ディープ・エコロジーに通ずるような先見性があったと見ることが出来るのではないだろうか。

このように、「エコロジー」の視点から論理的に神社合祀の弊害を指摘し、意見を示し、協力者を得て、直接行動をもって運動を展開したという点において、南方の運動はディープ・エコロジーの先駆けともなる自然保護のための運動として、大きな意義があると言える。

次に、南方の神社合祀反対運動と内発的発展の視点は、(1)生態系に適合する、(2)地域住民の協力や自立的であることを重要視する、(3)伝統の再創造を重視する、(4)近代化論の弊害を乗り越える、といった点で共通性があると考えられる。それぞれを具体的に見ていくと、まず、(1)生態系に適合するという視点との接点としては、南方による自然に寄り添った方法が地域の利益につながることを指摘があげられ、生態系に適合することの重要性についての視点との共通性がある。(2)地域住民の協力や自立的であることを重要視するという視点とは、南方に地域の意思決定や自治を重視する姿勢があり、地域住民の協力や自立的であることを重視していることから接点が見出された。(3)伝統の再創造を重視するという視点とは、南方の伝統の重要性についての指摘と考えられる発言等があり、再創造にまでは至らないものの、伝統の重視という部分での接点がある。(4)近代化論の弊害を乗り越えるという視点とは、神社合祀政策が近代化を遂げた国々のモデルをそのまま輸入して、外発的に近代化を進めようとした政策の一環であり、南方はその弊害を指摘して、それを中止させようとしたことから共通性がある。

また、生態系への適合と地域性を重視するという点から、南方の運動と内発的発展は「地域主義」を共通項として強く結び付けられると考えられる。「地域主義」とは、地域の住民

が、その地域の風土的個性を背景に、地域の共同体に対して一体感をもち、地域の行政的・経済的自立性と文化的独立性とを追求することをいう。鶴見(1981)は南方の神社合祀に関する運動が、この「地域主義」の立場に非常に近いといい、「地域主義」提唱の背景に生態学の重要性の指摘があることから、南方を「地域主義」の先駆的思想家であると指摘している。また西川(1989)は、「地域主義」による地域発展をめざす思考が、内発的発展の重視する自力更生の思考に極めて近く、それと内在的な連関性をもつことを指摘している。このように、南方の運動における「エコロジー」的な視点を重視することと、地域性を重視することが「地域主義」というものを共通項にすることによって、内発的発展と深く関連付けられた。そして、こうした「地域主義」的な側面から彼の運動には内発的発展への潜在性があると考えられる。

続いて、外発モデルにしたがう近代化路線とされる神社合祀政策の影響として、(1)地域自治の破壊、(2)地域内の経済構造や社会システムの破壊、(3)一部の人間への利益集中による不公平な構造の創出、(4)自然破壊、(5)自然と結びついた人間の生活・営みの破壊、という問題点が考えられる。また、中央集権を押し進めることで、(1)中央政府という強力なリーダー、(2)その政策を浸透させる仕組み、(3)それを支える財政基盤、が確立され、外発的発展の利点である短期間での近代化の実現を促進したと考えられる。

7. おわりに

ディープ・エコロジー、内発的発展という環境倫理的視点と南方の神社合祀反対運動における思想における最大の共通項は、「エコロジー」的な視座に基づく自然環境への配慮と中央集権的問題に対しての地域性の重視という視点ではないだろうか。環境に調和した「持続可能な開発」というものを考えていく

際に、こうした「エコロジー」の視座に基づく配慮と地域性の重視という視点は、今後ますます重要になってくるように思われる。

開発概念においても、1990年代頃から地域性を重視した「参加型開発」への議論がなされてきている。「参加型開発」とは住民自身が地域の問題を発見し、その解決のために計画をつくり、プロジェクトを運営、評価する、といった開発の全プロセスに参加することである(佐藤 2007)。こうした開発概念が登場する中で、開発コミュニケーション自体も、外からの介入によるものから、内からの発展への動きを支援していくものへと移行してきている。このように、外からの開発ではなく、どのように内からの発展への取り組みを促進していくかということが開発協力の分野でも重要視されてきており、そのなかで地域性を重視することの意味は、今日ますます高まっているのである。内発的発展は、まさにそうした内からの発展への取り組みを高めていくものであるとともに、自然環境への配慮を持ち、地域性を重視している。したがって、今後目指すべき発展の方向性としては、特に内発的発展の視点を織り込んでいくことが重要となってくるのではないだろうか。このように、内発的発展は「持続可能な開発」や人を中心とした内からの発展への取り組みを促進するだけでなく、コミュニケーションのあり方そのものを問い直すものとして、多くの潜在性を秘めているのである。

今後の研究として、内発的発展の阻害要因となりうる外発的発展の影響をより深く検討し、なぜそれが多くの問題点があるにもかかわらず行なわれるのかを明らかにすると同時に、内発的発展性を重視した実践事例を調査・研究し、それを「持続可能な開発のための教育(ESD)」という分野とも結びつけることで、各々の地域に適合した発展への取り組みを促進していくことが期待される。

注

- 1 本研究における「エコロジー」という言葉は、生態学という意味だけでなく、そこに社会や人間自身を含意したもののことを指す。
- 2 生命圏平等主義は、人間は人間以外の生命と密接に関わり合い、親しむことから深い喜びと満足を受け、人間の生活の質は、一部ではそれに依拠しているという考えに根ざしている。
- 3 ネスは生態学者が重要な情報提供者であるといい、彼らがうまく団結できれば生態学的視野の狭い制度や仕事を拒否できる力を持つと指摘している。
- 4 鶴見は、「地域とは、国家よりも小さい区域を指す。そして、かならずしも一つの国家の下位体系には限定されない点で、従属論における地域と区別される。いくつかの国家の境界線にまたがる小地域を指す場合もあるからである」(鶴見和子, 1989, 内発的発展論の系譜, 内発的発展論(鶴見・川田 編), p.50, 東京大学出版会)と指摘している。本研究における地域の定義はこれに準ずる。
- 5 経済的, 文化的, 政治的に外部への依存をなるべく少なくすることである。
- 6 現代に存在する問題を乗り越えるために、地域の伝統を現代の状況に合うようにつくりかえて用いることができる考える。

引用・参考文献

- 鶴見和子, 1997, 日本を開く, p.28, 岩波書店。
アルネ・ネス, 1973, 浅いエコロジーと深く長期にわたるエコロジー運動。一つの要約, 1999, 原典で読み解く環境思想入門(A.ドブソン 編), p.258, ミネルヴァ書房。
鶴見和子, 1999, コレクション鶴見和子曼荼羅 IX 環の巻—内発的発展論によるパラダイム転換, p.32, 藤原書店。
南方熊楠, 1912, 神社合祀に関する意見(原稿), 1971, 南方熊楠全集 第七巻 書簡 I (岩村・入矢・岡本監修), p. 537, 平凡社。
後藤正人, 2002, 南方熊楠の思想と運動, p.190, 世界思想社。
鶴見和子, 1981, 南方熊楠, p.231, 講談社学術文庫。
西川潤, 1989, 内発的発展論の起源と今日的意義, 内発的発展論(鶴見・川田 編), p.26, 東京大学出版会。
佐藤真久, 2007, 2007年度『開発協力と環境教育』講義資料, 武蔵工業大学。